

勇婦  
全傳

繪本更科草紙

初編  
卷之一

光文堂

浦五冊

五拾番

特
遠 13
977
100





明遠13  
第977  
卷1

本卷



栗杖亭鬼卯著  
石田王山画

全五册

# 更科子紙

浪華書林 岡田群玉堂梓

序

信之相木氏夫妻。實為山中鹿介父若  
母。蓋有此父母而後有鹿介。世人唯傳  
稱鹿介武勇而莫知其所出之絕倫者。  
其顯晦有幸不幸也。前歲遠人鬼印客  
遊浪華。寓居之閑。記其所聽事蹟。詳且  
盡矣。乃使画工馬園加圖像以成冊。題曰





更科草子。更科其婦名。題以此者。殊稱  
其艷。而勇力身。請余冠一言。余謂人  
心固有四端。而不知充之。必如聖教何  
哉。是故苟可敷四端以導善。則雖得官  
小說。亦足以助教。况斯編所記。壯士  
烈婦。實希世之仇麗。而志必忠。操必貞。子  
載之下。令人心感動。砥礪焉。且以知鹿介

武勇有由出也。然言不文。豈不更遜。辭  
不巧。則不足達意。是作者之所竭力已。  
若夫近世俗間所行。談士之雜記。怪力亂  
神。聖人所不語。奇事異聞。伸寸力。其  
譽詆諧。虛飾失實。別為斯編者之所不取  
也。梓而行諸世。何不可之有。

文化幸未孟夏

葛波山人





自序

顔氏曰上智不教成宜成哉三條の翁伝たる  
 丹まき此時意よ一ツの小説と稱するは是を筆  
 頭ふ成る暇なり一日平ふいつくか腹中  
 女をこは稽察なり足下其趣を録むらんや或る  
 一夜茶菓はもも招ト夜話せんとゆる小ご予  
 も茶菓の一をみ送るに本はももとては  
 机に欠しとてあて多給といふや三條の家より  
 せむく時々戻る雀に彼亭よりむりされはあは  
 嬉しむる約束は茶菓煎菓子等なり引出され

松風の音りる一人やきくア人々襦袢志の  
 お其火音を説きつた勇夫の手ふ男子の情を  
 述婢一人の甘きみ女は禁言あり何と云やが  
 漬のてんもんどもいれぬ趣向なれば感心の余り  
 予も席屋のいりりに傳へ腰のらんどもに假令  
 背佐考れ物とてを喰ふも世うある理心  
 ナらざる意をあらがれば是も他是と流自筆治  
 の大はは魚はなりとて嘶を画し書するは

文化七庚午の春

遠州小夜中山棧

栗杖亭鬼卯誌



目次

卷之一

相木森之助が由緒の話

更科森之助が億病を憤る話

牧島大九郎狼藉更科勇力の話

卷之二

更科再び危難森之助勇猛の話

相木森之助甲州へ引渡る話

卷之三

相木森之助死刑に達する話

更科夫の死骸と葬并幼子と失ふ話

相木市郎兵衛の話

卷之四

更科不量山賊の徒小成る話

横田道安加賀國菊酒屋小仕の話

於菊幸助加賀國と立退話

更科雙言以復る話

鴉勘左衛門本名と明と話

卷之五

更科再び森之助に逢ふ話

森之助幼子と得る話

森之助甲府を辞して遠州へ趣く話

森之助井上九郎小逢ふ話

目次畢



余之腹內豈田于一石頃者喫茶不計  
 咽出此石玉工鬼印子見之為璿  
 持去而切磋琢磨以成真玉其光  
 赫々每貝可照十五來余怡出望  
 外雀觸之餘終喚毛公記其事  
 是則克璧求燕乎  
 文化辛未夏 三條茂依及  
 長孔山  
 寅

馬場美濃守



仁者必勇 以足于城  
 甲之諸將 誰比其名



甲國為囚日  
英雄感動人  
誰知有鮑叔  
不敢殺忠臣

相木森之助





更科姬



艶妖兼勇武  
擇配得良雄  
烈志如金鉄  
侵凌危険中





千金蔽醜  
錦帶羅襦  
春情不已  
誤走姦夫



於菊

姦之又姦  
終不肯斷  
身首分斷  
天鑑自知



鑿道安





牧島大九郎

勇婦繪本更科草紙卷之一

遠州小夜中山麓 栗杖亭鬼卯述

相木森之助由緒の活

漢書曰三公非其人則三光為不明とや爰小人皇百六代  
 後奈良天皇の御宇天下大よとまきし足利將軍義晴公  
 京都小在せども國々蜂のぶいり起り西國よりハ鳥津大友  
 菊池竜藏寺東國より今川北条北國より武田上杉村上  
 諏訪の輩たがひよ蝸牛の角乃争ひ止事なく英雄星の  
 ごとくいつくのき天地始りくよりの大乱糸を乱せしは  
 ありといひ治世とならぬくもゆきざりなる此時信州より  
 上左衛門尉義清とつる人ゆりせく源家の嫡流あり





第...  
...



信州の城下  
繁栄の圖

第...  
...



強勇の大將ふぞつとける家臣ふハ樂岩寺右馬之助  
 九郎光與綿内左内左門相木市良兵衛牧島玄蕃  
 一騎當千此人傑なり義清を補佐しけきバ勢大  
 けらんして殊ニ小笠原諏訪木曾の大守小睦とたがひ  
 勢と助もまハ駿州の今川相州の北条など北国の地を  
 と事とあくあくらく静溢ふなり多ク義清の家臣相  
 木市良兵衛いさう主河うゝむる事うゝ蜜小国と立退  
 甲州の武田大膳太夫晴信小降せけは是より先信虎乃  
 代す村上と武田と不快なりを多量バ強ク義清是と怒り  
 たびく合戦らるといども武田方すを武勇絶倫の輩多  
 くいけも敗北なれよび無念の月日を送らま多此家老樂

岩寺右馬之助が娘も更科姫と世小希も美美人なり  
 それ姿乃艶なる事いさの西施楊貴妃をまのく我朝  
 の衣通姫小野小町を面はるげはうり此容色より三つも  
 カ飽ましく強く能千金の鼎をわけ剣術ハ同家中小聞  
 えまは井上九郎光與乃門人小此更科よつくもはも  
 うらに父右馬之助も一人娘に加やりに万夫不當乃勇  
 けきは又なきものといつくし心の供よ育け此娘十六  
 才もあひ多きむ所より婚姻の事を言よりけきと  
 更科心おれしや我女おこそ生きたれ君の正大事ら  
 けきを一方に大將ともう多うらんとすふ何ぞ碌  
 けき男と一生男と守らむらばに英雄豪傑よりけき



んば夫とてと由とよきと心よおさめよまきハ父よとかくと  
 いひ終ふ返事とせぬ打とぬ多敷爰ハ先年国を立退武田  
 家へ降参せし相木市良兵衛が甥は相木森之助幸雄と  
 つふこれあり今年廿一才も顔色美玉のおとく威有く  
 武うらば終に怒りはらうハせし事ふし叔父市良兵衛  
 が降参を諫々まきど用いざればやむ時を得ぞ其身ハ信州  
 ふらり忠臣無二に仕へけぬまきど義清ハ叔父が不忠  
 と怒り森之助ともおとく用いざれば平士ふりて年月を送  
 りける其頃村上の家中に誰りよとまき相木森之助ハ万  
 夫不當の勇士なりと沙汰なりまきど誰あけく其振  
 舞を見し人もつら涙も執権おほく井上九郎は

森之助ハ信州一に豪傑なりんと称美しつら右馬之助  
 が娘更科師の常は森之助を英雄ありとのこまきと心  
 憎くおとく其人と見ざやと心がけぬまきど森之助ハ叔父  
 の不忠を恥ぢ閉籠り兵学のこまき心代委將まきど其人  
 と見まきどへなつ月日を送りけぬまきど或日井上九郎  
 森之助と伴ひ右馬之助ハ對面し人事を福がひつら  
 右馬之助も娘が師匠あまきば真に通し且森之助をも  
 呼入對面し寒暖と述べ終ふ井上九郎声をいそまき  
 諸國糸のごとくまき我國もたびく晴信まきを交  
 とまき仕出しつら事もまき無念の月日をおくゆも  
 實ハ太守の旗下ハ英雄の士なりゆまき我諸家中







を見ると此森之助が上うへに立たてゝいふは、  
 是下吹このしたふき奉ほうじう太守たうしうの相木あひぎと  
 信州しんしう枕まくらを高くたかくおんおん夫おとこゆゑ今日けふ森之助もりのおすけと懸かり  
 て貴下きげへ伴ともいははりきりとははらへに語かたり  
 おと後のちき扱あつかくかたは事こともさう誘まよ引ひき  
 所ところもらうとて侍まじきど我われ幼こきより父ちち母ははよとままに叔父おぢ  
 市良いちら兵衛べゑ小養せうやう育そだせし何なにむとめ学まなぶ事こともふく刺さ  
 叔父おぢちうとておれを不忠ふちうを懐なつき甲州かうしうへ逃にげ去まはれども承うけを  
 世よに君恩きんおんを辱かたじけせし身みぢれが獨ひとりぢまり罷まは在ありといふ  
 叔父おぢの悪行あくぎやう小恥せうぢ入漫いりまんふ他出たえいといふ心こころ底そこおれ殊ことに  
 承うけを用もちひまふとれを信甲しんかうの合戦あひざふ叔父おぢ敵た方かたよあまを

も一稟いちりん切きやせんぢと諸平しよへいおとむいぢれおれもつらに我われを  
 此こゝゆ捨すておき多おほむい君きみの一大事いちだうじのとれ一命いちめいを奉たまはく人ひとこそ寒さむ  
 ぐの外念ぐわいねん願ねがうういおきういといと涙なみだをとうくと流ながし  
 右馬うま之助のすけも俱ともふ落涙らくなみ一足下いちあしもとの詞ことば尤なほなり大守たうしうも不忠ふちう者の  
 甥おひをまば用もちひまぬも無理むりなうい井上いの上先生せんせいの人ひとと見出みだし  
 うふも又忠義またちうぎうまきバ感かんどうふたえあり我われ此事このことを心こころお秘置ひき  
 とうは見合みあ合あ大守たうしうへ森之助もりのおすけの誠心まことこころをやや先生せんせいの吹奉ふきほうとも  
 悪あくしくハ斗とひやゆと其日そのひを別わかきさう帰かへりけふ此時このとき娘むすめ  
 更科さらしなかみろ見みまなくおとむい森之助もりのおすけが来きて  
 けきバ悦よろこびは絶たえどとれの際このときより垣間かきま見みまれば脊高せいたかく色いろを  
 く眼中がんちゆうきさうとくさう温潤ぬるぬるうして物事ものごと高たかあらば志こころとや



うつろ何不足なれ男ありおまきくば大掛想しく師  
 の仰乃ぶとく此人真の英雄なりバ豕夫おなれ人の森之助  
 より外よをゆらと頻小意この情をおこし一奮お井上  
 の亭おききり師よ其事を言出さんととふお恥うしく  
 胸ふさぐり血赤らうふなうばうりぬ言も出さて帰るけ  
 るいづらやみくに其人の傍立添ひ夜もどぐら寐もるうけ  
 憧々々々ぞ言はぐやまふ人も本意おし一やおとひけん  
 此事ぬと小認師のまきく贈りくる井上九郎のきつ更科  
 が用なりげよ来り一が何事も言とぞ帰る一をうけ憎く  
 れとひしに文のきりけれを不審聞き見まきど相木森之  
 助真の英雄とおぼし一やとべ君媒とかり豕を森之助が方へ

送るものきと書きたれバ井上はけりてきたり来り一趣  
 意とさとり扱と先日同伴のまき森之助を見を免し  
 ともう雇し一志う一是幸の事なり森之助忠を思ふと  
 ついとも主君と事ぐいふと終小此国とまらんも計  
 が一他邦めし一人を用ゆると死の虎と竹株お放さ  
 がぶと一右馬之助が聳とたり置バ足と繫くは屈竟  
 の事なりと即事お返事とまきくえかたり人おさら  
 せまふな我よれおこし言やと扱右馬之助が方へ  
 来り四方山のおまし一此序森之助が忠臣且英雄と称  
 し更科姫の聳おふさ一うあういをうらんと裏とへ  
 右馬之助うら笑ひ厚情辱くははへども去るう娘を



此存知の通り幼年より我俣ふところ生得武勇と好  
天下乃英雄うぐでハ嫁をまどりと日頃廣言と放らん  
殊ニ森之助ハ君の成るたがひかきと一者ふれへ如何  
ぢらんといへけま井上睦とていせられハ今天下悉く  
乱き豪傑時とえたる時節うれば森之助がよと人傑  
と用ひたる人ハ終ふ他邦ふ去らん其時悔ふとも詮  
ふらふべし息女と足とて一當家ふ置とれたハ時節至  
らば跋群の高名せんこれハ彼なり殊ニ息女森之助  
と掛想一うやうを承よく知るゆゑふ媒せへと来り  
まり思案一うくと勧めをすれば右馬之助も相木ハ柄  
事と慎と勇気をうけいざげれと奥ゆうくおとす殊ハ

娘が意慕するところまは幸の事なり君ふやて婚姻乃  
事ハ足下ふまう勢はつうを付とけま井上もよに  
よ後こゝ早達森之助と召さる此事と語るれば森之助  
きば一涙吟一う厚志かどけうハはども當時當家  
一の人乃息女日うげ者此某ニ誓礼あらん事天地雲泥  
の縁とや一かたに齟齬の縁談りるとれば不量火の  
るもれふはばいらふ免らざる所とて辞退しとされば  
井上も彼が遠き慮を感とせんとて足をはるぐの謀えん  
ハ打もくひかきとて足下鄙下を事なりと息女ハ信州  
第一の美形殊ハ大カ勇猛の婦人足下を掛想しと予ふ  
媒とたのむるは仕合の事やち誠ニ男子此望む所なり



乃とどやとさめど言こく之れは森之助もいふが縁の  
 馬之助ふかくと通トもれど娘より後とび大うさるるは  
 九郎とむとぶの神と拜とくあてねしとれ夫より義清  
 公ふかくとやて井上九郎が媒あし西家誓姻をやくれ  
 我万代と契り多れ

更科森之助が億病を憤る話

頃ハ天文の末武田晴信朝臣の武威旭のめあつがおよく  
 乃も強勇の聞えつる小田井又六郎兄弟と一時ア責  
 ほろ不し諷訪頼茂も殺害せし其家亡び木曾の左馬  
 之助も近ころねをむとむる村上義清今ハたのむ木陰り

雨漏り詮方なもれバ降とくわくれく志づく音信  
 と通トもれバ晴信朝臣も山本助助が諫と隣国の  
 小せり合に心とくけふ事なり天下平定の覇海  
 おとひとらつしゆ急義清が手指りぬとれ事お  
 思し越後の上杉輝虎との大敵なりと防禦嚴重  
 了々然愛ふ村上が家臣牧島玄蕃が弟小大九郎と  
 りよものり無う右馬之助が娘更科ふ心をうけ人を  
 もとさぬく言おしとれどもいふがのせは則森之助  
 が方へ嫁しとむき本意なり事おせし忘まんとする  
 小跡より意の責来むせ免ふ其人のをがさなりとこと  
 見く慰むやと森之助閑暇ふ基と用たれは是幸と



折ふ一ハ音信く甚だ打まれば更科が姿と見るゆゑ  
 たのしみたるうよく憲ふ身とやハ一不斗悪念を生ト  
 何とぞ森之助と害一なむ心ふふ事もつらんりと  
 先年亡び一小田井又六郎が従弟又ハ八ふ事カ飽すむ  
 ほよく銀術の達人なり多分が小田井討死のとりハ武者  
 修行不出跡うう其事とふふとりとせん方々けもさバ  
 牧島女蕃とち由縁のり多分が食客となりてつと  
 ひとうふ招き謀と授け折ふ一ハ森之助が方へ伴ひ俱二  
 甚と聞くる或日二人来り多分が森之助も幸い閑暇  
 ろりと甚盤と出り一甚をはトめたる見大九郎が謀とて  
 又ハ八助言う男森之助ハ十分怒り起させ刀を抜一の

又ハ八森之助とくせ其場と立退せしむる自更科と  
 妻おせんとど工とけ家夫もううと甚お打入一時又ハ  
 大九郎へ助言一けりゆや森之助肩よりうれど何の怒  
 り一体もなく又打りて多分此度ハ又ハはトめより  
 助言一これと森之助ハ自若と一構るハ今ハ又ハ  
 半より一森之助をくく白眼とくく不甲斐とあ  
 腰抜く武士の助言をさると咎もさば頼おしぬぐひと  
 二番うう肩事体との兎か一ありかアしれとの不附  
 合うおはご帰るさる一と言うぬ甚笥を取る森之助が  
 顔へ一うら付きバ甚石ハ四方へ散乱せり今ハたまり  
 一カ取抜く人柄小手をうけさバ大袈裟お打放





更科 大九郎 又八  
の悪口と憤り

更科

又八

大九郎

鳥羽全集卷之二

鳥羽全集卷之二



相本森之助

又八

大九郎



うんと鯉口くろけ待たれど森之助ハ三づふ基石を  
 拾ひよ勢あつて其をこけもろくしと其盤を  
 傍へ直とめば兩人をゆきりお詞も出で手持不沙汰ハ  
 帰すけ教妻更科も此体をこけけより詠り居るが  
 ろうへう保く長刀の鞘をこげし玄関へけ出るは森之  
 助あうと抱とめ汝狂気むしせし何事をこぞとあま  
 かけし更科ハ猶せねと我夫とめめあふなが教不願の  
 悪漢長刀よりけも恥辱をこぞぐんと猶も馳行と引戻し  
 有倫絶者あまも主人の家来をこぞとてく女かと駭し  
 きとのハわくどと長刀引取るとの所へけめた夜ハ東を  
 ひく見えどと三輪の諷をうけいふを更科ハわたり忙れ

てその言とばらむが夫の心とをかりくも深き思  
 案もあるやうんと涙をこけぬが部屋ハ入る其夜夫の  
 気色と伺ふは何の事も平生活るれば扱ハ翌の夜  
 意恨をこぞしと待も終お其沙汰をこぞと疑ハ  
 こてハ人のうらふ違ハ真の英雄をわらうと疑ハ  
 と生トいろく怒りばこしと様し見えど終お怒りし  
 体を見れば常ハ机上と七書三略の兵書と置く  
 昼夜熱讀する体なれば心迷ひて暮しと或日森之助  
 近所へ出ると日の暮ハ至ると帰らば更科はやみ  
 不用の所ハ長居する人より何ゆあみやと家長渡  
 邊惣内とむいふやうんととる所へ顔色をこぞと帰



まは更科ハ心を痛め平生とちがひ遅く帰らせよ  
 えりふ顔色の何しく見えゆへ途中めも心  
 あしくおとせしやと惣内も後にもまがひ承れん否を  
 おろし今日氏神森浩の帰道と甲斐侍と思  
 きよか七八人向ふより来り又こりより上方武士  
 と見えしとの四五行ちがひに鑑りしと言  
 上り双方接合せ戦ふゆゑ森のうげも隠れ暫  
 くはつらつらといひ果てきも見えざればやうく二里計  
 ほり道しり帰りなり互小切つききり鮮血不  
 どばし目もらてらまぬるゆゑ積気し一歩を  
 由道も墓取どやうく帰ると大息継ぎす漸し

多きハ更科けり夫の億病事とまり忙然して  
 けりけりたあぬ体うゑ某をけり一間入置  
 思案しふの深窓よりけりし  
 たり天下の英雄と夫ふ人と廣言と吐森之助  
 豪傑と世上のうらまゝ其人と見まほしく垣間見  
 けり形之美形心うはり且ハ英雄とわたりつ  
 さまぐと心と尽し嫁入せし甲斐なくかく億病人  
 なるんふ此事世上へ聞えたり右馬之助が娘ハ口  
 かごもろし森之助が器量ふり日本一乃  
 億病人の妻とたりしと言れんを我むりれ恥辱  
 おあし父上も不吟味のそれしひふなりあはせ



事何方口と一き事なりたれど女ハ二人の夫とわれば  
恥の第一ととるるまきバ今うう二夫ふまみゆらるる  
けふふなり此うへハ氏神ハ幡宮へ祈誓と受け奉り力量  
と夫と授むへと百日歩行ととるびかばるどて納受なり  
らんやも一此祓がい叶ふハ奉命を絶ふと祈らん  
と一心お祈りいつた翌日より泰治せんと心おこめたる

牧島大九郎狼藉更科勇力の話

かくて翌日更科ハ森之助が前より出てハ幡宮へ百日の日  
泰のふりと祓がい多きバ相本も女のいづが奉りハ思へ  
ども社泰の奉りハとむ辱もあはれ其日より渡辺惣内  
とつれと日毎ハ氏神へと詣りたる此より牧島大九郎の

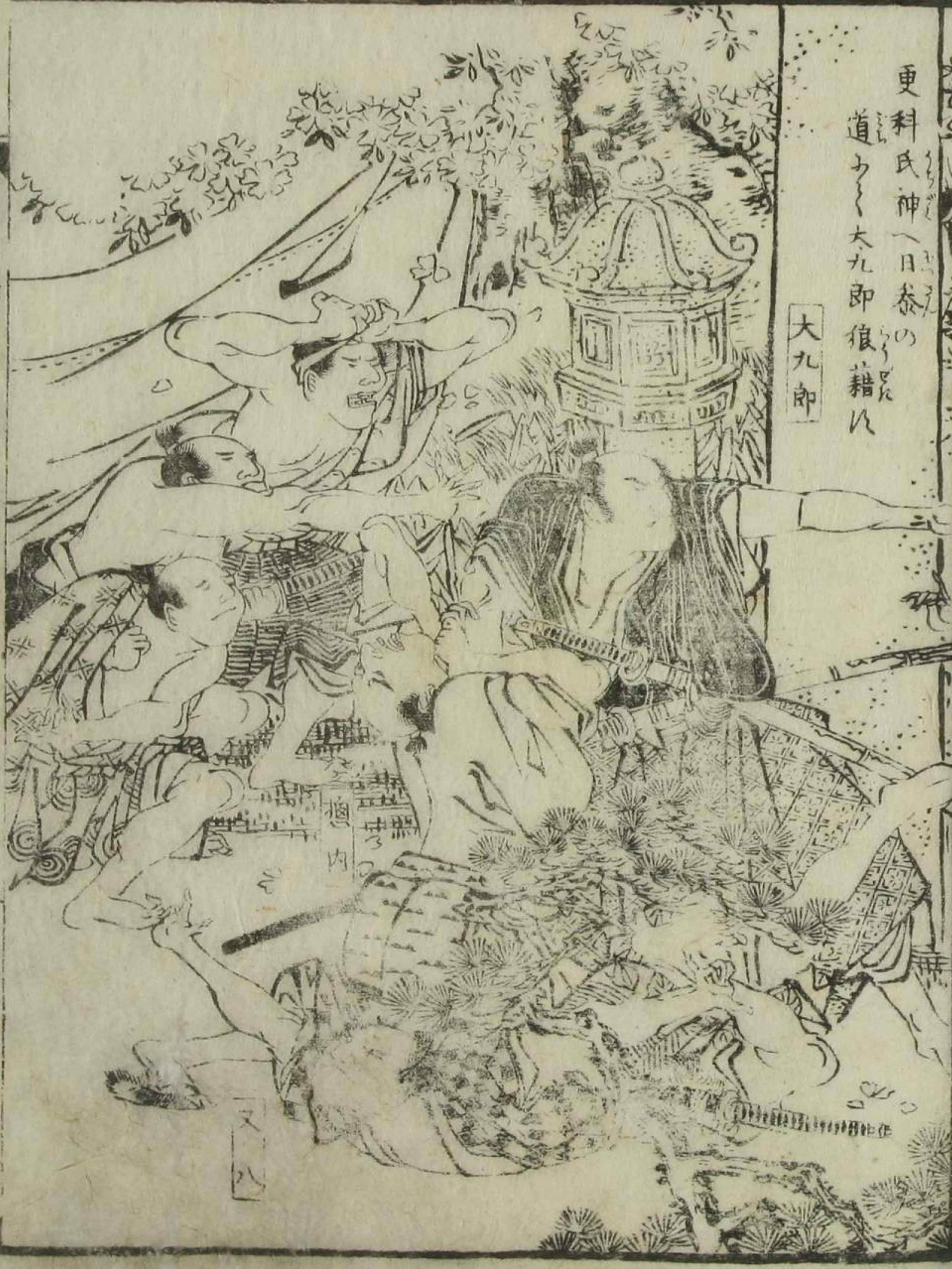
聞くと大ふよろこび承森之助と討ち更科と妻おとへ  
と謀をとけに彼が堪忍つよれよやむと得ば今  
彼が方へゆくことと叶とび心をいづりお何ぞ計らん  
更科氏神へ日泰とるるや天のつらなり途中に侍  
伏しと彼と棄れ奉り之助ハ鼻ゆせん屈竟乃武  
士十人むりかたしといふれ更科ハ大力のきこえあま  
ううのふちふりがきくと小田井又八と一人當千となり  
森の傍に幕くらまはし今や来ると待ちけりかた  
事ともきくと更科ハ渡辺惣内ハ中間一入めしつと  
いれものごとく日泰とるる頃ハ天文廿年卯月の夜  
ふれど信濃路ハ今とさうりと櫻の咲ちりち散ちほりぬ



うらやうゆと雪うとあやまふれぬまき氏神へ願言一し  
 木蔭ふ立ちり彼のうらやうり花を詠うる由定ふ  
 天人影向らるるやと心うれ宮奴どもも涎と流し  
 其人と目がまきせば詠めたる牧島大九郎時分しとや  
 ねりいん幕の中よりつと出更科が手とり君は覺  
 ひらんいま右馬之助を方おひきし時より志は心さく  
 行くがれ人とりくや入いへども難面返りさるる刺億  
 病無双の赤之助が方へ嫁し一事のうらやうしと先日  
 赤之助とはうり又八討せ君を赤手お入んと口論は  
 させしお億病者の赤之助相手おなすし孫バ手持り  
 歸り其後を君と見る事えさるる命ももゆるはうり

意慕ひし結の神は捨多は頃日日参をけりめり  
 と聞より飛立しとくをとりて爰お侍りけり返り  
 うらやうり假令いささうも無理も本望ととげ  
 ほうきん其用意もいささ先し幕の中へ来  
 りと引立行人とさるる渡邊惣内大お怒り當時  
 出頭第一の牧島氏の舎弟ふりし余りうらやう若  
 無人のふりまはる是と相木赤之助の如室に人か  
 ていぞや比叢しと引とけんしとを大九郎か  
 く笑ひいささ倍臣の分才さるる過言千万  
 らし引退しと叫りれ幕の中より雲突ぶれ大の男  
 のさり出惣内と小児のどく傍へ投のけしとみれ





更科氏神へ日泰の  
道々大九郎狼藉以  
大九郎

更科氏神へ日泰の

内

又



更科

更科氏神へ日泰の



更科心よ十一分の怒りを發するくはとも婦人のたゞし  
 も爰かりと會釈しし志のほどはうれしきは返さるる  
 今ハ惣内が中ぶとく赤之助が妻小侍まは返さるる  
 がしやうせまへと恥しげふ立退バ大九郎ハよく魂  
 天外ハ飛んぢうぐさハ宣ふぢや赤之助ハうがへ者  
 の親類うれは川追出されんもまきぬ奴らひらみ我  
 にたむきまゝ無理下手と取り引立んとらふ金輪際  
 ようへぬいさむく動くバ大九郎心りち又ハ引立よ  
 と声よりいざあへ立寄とろと引摺んぢ二三間  
 投付まば狗子のぶく遙の谷へこけ込ぐりま曲者どと  
 幕の中より十人むらむらくと立出我組とらんときほひ

かゝる人研ふぢうと投付まバ今ハ大九郎たすり  
 うの太刀引抜ち切てうらむ引ひて刀もだせ  
 腰骨小ぢぢえよとらひ打よとくと打たれバ大九郎  
 はよくうらむ目くらめきく絶入る此勢よおれん  
 十人むらむ悪漢と蜘蛛の子とらうとぞとく何国とと  
 うく逃去けぬ相手たきまバ姿ういつら落し惣内供せよ  
 とまげくと見えんもせだ立帰る惣内も始て婦人  
 の快力と見え舌を巻く帰るはかくて赤之助ハい  
 つもより妻れ歸り遅れはいと門外へ出て見やる  
 所へ供の中間息を切ち立帰るまじぐのどと述べぬ  
 赤之助大九郎とらきかす事のうらんとはまう一年どの



惣内と供ふはき置れば幾重も佳言して帰らんと  
待りち主従無事小帰るれば赤之助も流るる始終  
のやうと尋ねれば惣内大九郎が狼藉更科が強勇  
落もなかりかたりまき赤之助ハふとやうなる息をつた扱  
く婦人の力やうんハ世のまかりをのまら何ぞ討らんか  
災を引出うんと六牧島玄蕃ハ殿の近臣其弟小かく  
無礼なりまハ更科ハ我方小置をやく右馬之助  
方へ送り猶も惣内付そい門外へ一寸も出さずは舅  
も巖鋪門外へ出しまふまこべーといひかたり  
以の外怒りまれば更科ハ思ひもようば象手柄と夫小奉  
らきんとたれいハ常小かりり夫の怒り小婦人の身は

かろーさ小泣く右馬之助が方へ帰るれば惣内も其き  
へ小泣く赤之助が口上は述べれば右馬之助且せりき  
且娘が大膽と怒り玄蕃への言談みきびく一問一  
押込めきける大九郎ハやうく心附又ハも谷底より這  
上り互ふ白を見合をどく帰るれば赤之助も赤るせり思  
事なれば無念まぐろ沙汰まーにろろろ終

繪本更科草帛卷之一終



